

## 資料紹介

権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	13
号	1
ページ	55-56
発行年	1996-03-20
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00006344">http://hdl.handle.net/2344/00006344</a>

細野昭雄「APEC と NAFTA：グローバリズムとリジョナリズムの相克」東京 有斐閣 1995年 xii+271ページ  
ピーター・スミス・西島章次編「環太平洋圏と日本の選択：オープン・リジョナリズムへの道」東京 新評論 1995年 252ページ

昨年11月に開催された APEC 大阪会議では、「行動指針」、および「行動宣言」が採択され、APEC を「ビジョン」から「行動」へと一歩進めたと評価されている。しかし、一方でアメリカとマレーシアの自由化政策の「自主性」をめぐる対立、中国からの早急な自由化政策に対する懸念が出されるなど、地域統合の困難さも浮き彫りにされる形となった。日本の報道では、米大統領が欠席したこともあり、アジア諸国の代表の動向に関するものが多かった。しかし、経済規模の上で APEC の重要な一角を担い、かつ、制度として先行しているという点でも APEC (アジア経済協力会議) を NAFTA (北米自由貿易協定) および米州の他の地域統合と関連づけてみる視点は非常に有効である。

この二書は、上記のような視点で APEC 大阪会議を前に刊行された、まさに時宜にかなった書である。それとともに、細野 [1995] は制度的・歴史的に詳細な分析を行ない、一方スミス・西島 [1995] は論文集の形で政治学、経済学というそれぞれのディシプリンで論考を加えており、対照的、かつ補完的な内容になっている。

細野 [1995] では、著者のこれまでの米州を中心とする地域統合に関する深い分析に基づいて、APEC の意義と今後の展開を、それをとりまく地域経済圏の発展の観点から検討を加えている。特に APEC の最も重要な一角をなす NAFTA、さらにそれを包括する FTAA (米州自由貿易圏) 構想と経済的効果、

および制度面での比較は APEC の今後を考えていく上で、非常に有効である。

また、スミス・西島 [1995] では、「地域統合はグローバルな協調関係と必ずしも矛盾しないが、同時に自動的に整合的な関係が実現されるものでもない」という共通認識のもと、政治学・経済学という立場から、それぞれの地域や国々にとっての可能な政策的・戦略的選択肢を導き出している。地域統合というインターディシプリナリーなテーマに対するアプローチとして、本書は成功しているものと思われる。

両書は、分析手法は異なるが、ともに日本の役割に関する考察がなされている。地域主義の高まる中で、日本を含むアジアにとって最も有効である緩やかな自由化を基本とする地域統合を進めるにあたって、日本が率先して自由化を進める必要がある、という点で共通しているのは興味深い。(北野浩一)

国本伊代著「メキシコ1994年」東京 近代文藝社 1995年 248ページ

1994年のメキシコは、例年にもまして、重大事件が起きた。サパティスタ解放戦線の武装蜂起、大統領選挙、与党大統領候補の暗殺、与党幹事長の暗殺、通貨危機(ペソの暴落)、等である。この一年、メキシコで過ごしたメキシコ歴史研究者の著者が、これらの事件の経過を臨場感を持って報告するとともに、前大統領の6年間、先住民の生活、メキシコの世界階層、ナショナリズム、大気汚染、女性問題、犯罪、等、政治・社会的背景について、率直に語る。

いわゆる紹介書といえるが、本書の特徴は、既成のメキシコ像にたよることなく最近のメキシコの変化を描きだそうとしていること、著者の評価、判断が躊躇なく示され、その際にどのような根拠、情報

に頼っているかを明記していること、さらに、それらが、著者のこの国についての研究の蓄積に基づく見識によって支えられていること、にある。

読者は著者と一緒に、「事件がいっぱい」のメキシコをより理解し、より興味を持ち、あるいはより魅かれていくことになるかもしれない。(米村明夫)

稲村哲也著『リヤマとアルパカ：アンデスの先住民社会と牧畜文化』東京 花伝社 1995年 285ページ

アンデスに関して、日本人の手による文化人類学分野の研究は、これまで農民社会を対象としたものはあっても牧民社会を扱ったものはなかった。著者は自身のフィールドワークに基づいて、アンデスの牧民社会に関する民族誌的記述をするともに、牧畜文化全体の枠組みの中にアンデスの牧畜を位置づけて考える、という意欲的な試みを行っている。

第一部「フィールドワーク」、第二部「民族誌」、第三部「牧畜文化再考」という3部から構成され、気楽なエッセイ風の出だしに始まるが、読みすすむにつれて高度に専門的な議論が展開される。アンデスの牧畜は旧大陸のさまざまな形態の牧畜と大きく異なっている。主たる経済基盤はアルパカの毛とリヤマの輸送力であり、二次的に肉の利用があるが、乳は全く利用されない。また農民との間に緊密な相互依存関係が存在することも特徴としてあげられる。われわれは、農耕は定住的であるのに対して牧畜は移動を必要とする、という前提に立って考えがちだが、著者によれば、中央アンデスではむしろ牧畜が定住性と、農耕が移動性と結びついているという。標高差による多様な環境を利用することが農耕に移動性を与え、4000メートルを越える高原に「寒地適

応」したことが牧畜に(半)定住性を与える。

その他本書では牧畜文化全体に関する大胆で刺激的な議論が展開されている。(石井 章)

前田正裕著『ラテンアメリカと海：近世対日外交史』東京 近代文藝社 1995年 210ページ

日本にとってはるか太平洋のかなたにあるラテンアメリカ諸国との交流の歴史は浅く、一般に知られていない史実も多いが、読者は、本書により、ラテンアメリカ史の思わぬところで日本史が交差していることに驚くかもしれない。

本書は外交官として長いキャリアを持ち、現ラテン・アメリカ協会理事長である前田氏が、日本ではあまり知られていない興味深いラテンアメリカ諸国の歴史的出来事を現地の貴重な資料等に基づくエピソードを交え綴ったものである。

全9編で構成されており、チリ、アルゼンチンから日本に移籍した3隻の軍艦「和泉」「春日」「日進」の命運をたどりながら、ラテンアメリカと日本の歴史的関わりを語った1、2編。マゼランの航海と太平洋戦争における西村、志摩艦隊の悲劇を交差させる第3編。ハイチ独立戦争とナポレオン失脚を綴った第4編。日本の太平洋戦争を重ね合わせたパラグアイ戦争。フランスのメキシコ介入戦争。ペルー進出に失敗した高橋是清。メキシコ革命と堀口久万一、日本との関わりの深かったドミニカ共和国トルヒーヨ大統領暗殺事件の顛末等、さまざまな人間模様が描かれた生きたラテンアメリカ史である。

(村井友子)